

4月から導入のファシリテッドッグ 寄付のお願い



ファシリテッドッグは、病院で活動するために専門的に育成された犬のことです。ハンドラーと呼ばれる、犬をあつかう研修を受けた臨床経験のある看護師とともに、入院患者の治療や療養生活に関わります。大きな特徴は、導入する病院の専属となり、それぞれの病院のニーズに合わせた活動を行えることや、患者さんが同じ犬と長期にわたって触れ合えることです。導入のためには、犬およびハンドラーのトレーニング、犬の飼育管理費用(定期的な獣医師の検査と診察、ドッグトレーナーによるフォローアップ他)ハンドラー人件費などで年間約1,000万円の費用が必要となります。そのため、皆さまからの大きなご支援が必要になります。何卒、宜しくお願いいたします。

<子ども達へのメリット>

- ファシリテッドッグと触れ合うことで、子ども達に安らぎを与え、ストレスの軽減が期待されます。
- 子ども達と一緒に手術室へ行ったり、採血などに寄り添ったりすることで、子ども達自身が治療に対して前向きに取り組めるような手伝いをしてくれます。(これまでに導入している病院の事例では、パニックを起こさずに麻酔導入できたということも報告されています。)



子どもたちの命を守るための医療機器の整備や、療育環境の改善のためにご寄付をいただくとありがたく存じます。当センターへの寄付は税制上の優遇措置(寄付金控除)を受けることができます。詳細はHPをご覧ください。
<https://www.ncchd.go.jp/donation/application.html>

各所連絡先

患者ご家族からのご予約 **予約センター** (直通)03-5494-7300 (月~金 9:00 ~ 17:00)

●医療機関の先生からのご予約・お問い合わせ

救急の場合 **救急センター** (代表)03-3416-0181 (24時間受付)

小児集中治療室(PICU)への転送・搬送 **03-5494-7073** 小児救急搬送チームにつながります

新生児集中治療室(NICU)への転送・搬送 **03-3416-0181** NICUにつなぐように伝えてください

母体搬送 **03-3416-0181** 母体搬送担当の医師につなぐように伝えてください

早期に診療が必要な場合
セカンドオピニオン外来
医療機器の共同利用(放射診断部) **医療連携室** (直通)03-5494-5486 (月~金 8:30 ~ 16:30)

国立成育医療研究センター 広報 SNS National Center for Child Health and Development

国立成育医療研究センターや、成育医療に関する様々な情報を投稿しています。ぜひ、フォローしてくださいね。



発行：国立成育医療研究センター 五十嵐 隆
編集：企画戦略局広報企画室 村上 幸司 近藤 留衣 田地 美香
〒157-8535 東京都世田谷区大蔵 2-10-1 電話：03-3416-0181 FAX：03-3416-2222



国立成育医療研究センターだより

NATIONAL CENTER FOR CHILD HEALTH AND DEVELOPMENT NEWS

2021.4.20 発行 Vol.26 陽春号

成育だより

Contents

セミナーのご案内/NEWS

センターの取り組み/診療科のご案内

新任挨拶/関連施設紹介

専門職(ひと)シリーズ/研究開発のトピックス

Information/医療連携・患者支援センターより

寄付関連

2021
Vol.26
陽春号



国立成育医療研究センター

セミナーのご案内

成育こどもセミナーのご案内

- 開催日** 6月24日、7月15日、9月16日、10月28日、11月25日、2022年2月23日
- 開催方法** Microsoft Teams によるWebセミナー
- 対象** 初期研修医・学生、小児に関わる全ての医療従事者
- 内容** 当センターの各部門の専門家が、それぞれの専門領域について講義するリレー形式のセミナーです。
- 参加料** 無料
- 申込み方法** 各セミナー開催の1週間前までに右記QRよりお申込みください。
- 問い合わせ先** 教育研修センター事務局 (ncchd_seminar@ncchd.go.jp)



実施日	テーマ	講師
4月22日(木)	初めての小児科当直	小児科レジデント
6月24日(木)	小児の低血糖について考える	飯島 弘之(総合診療科 医員)
7月15日(木)	こどもの風邪診療	庄司 健介(感染症科 医長)
9月16日(木)	川崎病の最前線～軽症から重症まで～	益田 博司(総合診療科 医員)
10月28日(木)	小児のマイナーエマーゼンシー	富田 慶一(救急診療科 医員)
11月25日(木)	食物アレルギー診療のABC	福家 辰樹(総合アレルギー科 医長)
12月23日(木)	論文の読み方	西 健太郎(腎臓科 医員)

NEWS ニュース

臓器移植センター長・副院長 笠原 群生医師 川野賞受賞



川野小児医学奨学財団は、かけがえのない子どもたちの明るく健やかな成長を願い、小児医学研究者や小児科医を志す医学生などに対して支援を行っている公益財団法人です。小児医学ならびに関連する研究の奨励を図るため、基礎医学・臨床医学・社会医学の各分野で優れた業績を上げ、学術の進歩に貢献した国内の小児医学研究者が毎年表彰されています。2020年度臨床医学分野で、当センターの笠原 群生医師が「小児臓器移植医療への貢献」で第21回川野賞を受賞いたしました。当センターでは2005年11月肝移植開始から、2021年3月現在までに肝移植664例、腎移植70例、小腸移植3例、肝細胞移植5例を実施してまいりました。病院・研究所・事務方の全面的な支援で、その成績も大変良好です。今後も国際的な臓器移植センターとして、病気で苦しむ子どもたちに革新的な臓器移植医療を提供してくれると期待しています。

ムコ多糖症II型 治療薬承認 世界初の脳室内投与用 知的発達遅れの改善期待

当センター臨床検査部統括部長 奥山 虎之が主導したムコ多糖症II型の治療薬が承認されました(ヒュンタラーゼ脳室内注射液15mg(一般名:イデュルスルファーゼ ベータ(遺伝子組換え))。この病気の患者さんの7割にみられる知的な発達遅れの改善を期待できる世界初の薬で、患者さんの脳内に投与します。

ムコ多糖症は症状がさまざまな領域にわたるため、当センターでは、複数の診療科と連携して、合併症に対する検査や治療を行っています。ムコ多糖症が疑われる場合、あるいはすでにムコ多糖症と診断されている場合は、火曜日の午前中のライソゾーム病センター外来(担当: 遺伝診療科診療部長 小須賀 基通)もしくは水曜日午後の遺伝診療科外来(担当: 臨床検査部統括部長 奥山 虎之)をご予約ください。

卓越したレベルの産科麻酔を提供する施設に世界的学会から認定されました

当センターは、米国産科麻酔学会(The Society for Obstetric Anesthesia and Perinatology:SOAP)により、卓越したレベルの産科麻酔を提供する施設COE(Centers of Excellence for Anesthesia Care of Obstetric Patients)に認定されました。これまでに、世界で約40施設(Mayo Clinic、Stanford University、Johns Hopkins Hospital他)しか認定されておらず、アジアでは2番目の認定施設になりました。

産科麻酔ケアのすべての側面(人材、機器、産科の緊急事態管理、帝王切開分娩および無痛分娩ケア、患者フォローアップシステムなど)など厳しい基準をクリアし認定されました。

当センターでは、年間2000例以上の分娩数があり、無痛分娩は年間約1000例行っています。日本での無痛分娩率はまだ6%のなか、当センターは産科麻酔に専従する医師が24時間対応する数少ない施設で、母児の安全を念頭に産婦さんに快適な分娩の麻酔管理を提供しています。

今回の認定を励みに、妊婦さんにより安心して分娩いただける環境を提供し、今後日本でも普及していく産科麻酔の安全性と信頼性の情報も発信できるよう、チーム一同より一層努力する所存です。

センターの取り組み

コロナ禍の家族の絆を支援～「窓」によるオンライン面会の実践～

こころの診療部 児童・思春期リエゾン診療科 診療部長 田中 恭子

当センターではコロナ禍の面会制限等を機に、ソニーのオントロジカル・デバイス「窓」に注目し、導入を検討してきました。

オントロジとは「存在論、ものの存在そのものに対する探究」を意味する言葉といわれています。人と繋がり、共に存在する、誰かと共に在りたいと願う人間本来の欲求を、距離を飛び越えて叶えてくれるのがオントロジカル・デバイス「窓」です。

「窓」は4Kで55インチの大画面です。まるで目の前にいるような「臨場感」や、同じ空間にいるかのような「気配」を感じることができるのが大きな特色です。距離の制約を超えた自然なコミュニケーションを叶えてくれる「窓」に注目し、当センターで導入に至りました。

・導入に至るまでの経緯

入院期間が長期になりやすい子どもと、家族待合室にいる家族を繋いでの使用感を調査するほか、医療スタッフにも「窓」を体験してもらいました。2020年5～7月の3か月間で、延べ132名が体験した結果、とくに「リアルさ」や「楽しさ」については高い評価をされています。

・ご家族からの「声」を一つご紹介します。

お子さんとお母さんは病棟で、お兄さんとお父さんは当センター1階のおもちゃライブラリー室で約30分の「窓」を介した面会を実践しました。その日は、入院中のお子さんの3歳のお誕生日。

「転院してもうすぐ一年。入院している妹に会いたくて会いたくて、でもコロナの規制で会えずに、病院にも入れず、疎外感を強めていたお兄ちゃんが、ドラえもんの世界から出てきたような「どこでもドア」ならぬ「窓」の話を聞き、目を輝かせ、妹を喜ばせるための企画(※)を考えました。たくさんの病院関係者の方に温かく迎えてもらい、病院に入っているんだ! という喜びと、自分も力になりたい! と

いう強い気持ちが爆発したようです。

入院している娘は、大好きなお兄ちゃんの呼びかけに、嬉しそうに、うんうんと耳を傾けていた姿が印象的でした。いつでも会える、近くにいてくれる、という安堵の表情に写りました。



この二人の大成功体験は、今までの苦しみを跳ね飛ばし、これからの人生、どんな辛いことがあっても乗り越えられるほどの力になると信じています! 本当に感謝しております。

娘の3歳のお誕生日を家族でお祝いできたこと、この素晴らしい技術のおかげで家族の愛を感じられ、最高の思い出となりました! 病棟で頑張っているみんなと、その家族に活力が生まれますように!



家族写真が撮れました!

「窓」があることによって、そこに人の気配が生まれ、一緒に過ごすという雰囲気を感じることが出来ます。オンライン面会は今後の新しい様式として定着していくかと思いますが、なかでも、「窓」のようなリアルさ、まるで一緒にいるような時間を過ごすことができるデバイスの価値は高いと感じています。

※プレゼントの絵が本物のプレゼントに! 風船の投げ合いっ! 剣を届けて剣で遊ぶよ!

不育診療科・妊娠免疫科

妊娠免疫科 診療部長 小澤 伸晃
不育診療科 診療部長 三井 真理

不育症を専門的に取り扱っている病院は全国的にも少ない中、当センターでは開院当初より独立した科として専門外来を設けています。成育医療の特色を生かし、各診療科との連携により流産の原因検索、治療、そして妊娠成立から出産までを包括的にサポートしています。

不育症とは？

妊娠はするものの流産や死産を繰り返して、生児を得ることができない病態を不育症といいます。既往流産2回の場合は反復流産、3回以上は習慣流産ともいわれています。1人目を正常に分娩した後に、不育症となることもあります。女性の年齢にもよりますが、妊娠の約15%は流産になり、不育症の頻度は約5%と報告されています。なお、妊娠反応のみが陽性で子宮の中に赤ちゃんの袋が見える前に流産してしまう生化学妊娠は、現在は不育症の流産回数には含めていません。

診療体制

外来診療は週4回行っています。不育症患者に対して行われている原因検索は多岐にわたっており、検査項目は年度ごとに最新の知見を取り入れ随時検討して更新しています。また、産科・胎児診療科・不妊診療科・母性内科・遺伝診療科なども連携して診療を行っています。

不育症の治療

現在のところ不育症に対する確立した検査や治療法は限られています。そのため検査や治療を行う際は、その意義について十分考慮した上で行う必要があります。

当科はセンター内の母性内科、不妊診療科、産科、胎児診療科、遺伝診療科等と綿密に連携しており、妊娠成立から出産、その後の育児まで

サポートする包括的な診療が可能です。検査で見つかった異常に対してはエビデンスに基づいて適切な治療を行っています。抗リン脂質抗体症候群や凝固因子異常での主な治療としては、抗血栓療法(アスピリン内服やヘパリン注射)を行っています。甲状腺機能異常や糖尿病などの内分泌学的異常の場合や染色体異常など遺伝学的異常の場合は、各々内科専門医や遺伝診療専門医と連携して診療を行っています。また、こころの診療部と協力し、患者の「こころ」のケアについても、十分に配慮した診療を心掛けています。治療を行うも再度流産に至った場合は、次回妊娠のために流産染色体検査を積極的に行って原因の特定に努めています。

手術治療や免疫治療が必要となる場合は、他の病院を紹介させていただくことがあります。

ご紹介いただきたい疾患

- 反復流産
- 習慣流産
- 死産の既往
- 早期新生児死亡の既往



耳鼻咽喉科

診療部長 守本 倫子

耳鼻咽喉科は、小児の耳、鼻、のどなど首から上の広い範囲を診療しています。小児にとって耳が聞こえにくいと、新しい言葉が入ってこなくなり、コミュニケーションも困難になります。鼻やのどに狭窄があると睡眠障害や、場合によっては生命の危険もあります。当院は診療科同士の垣根を超えた連携が強く、チームで話し合いながら、最良の治療方法を提供できるように診療にあたっています。

主な対象疾患



■小児難聴：当院は新生児聴覚スクリーニング後の難聴の精密検査機関であり、非常に多くの新生児が受診されています。また、聞こえに不安がある子どもに対しても、乳幼児の聴力検査や言語発達の評価を行い、必要に応じて補聴器装用指導や人工内耳植込み術を行っています。先天性難聴の原因の約半分は遺伝子変異によるものとされています。また、妊娠中のサイトメガロウイルス感染による胎児感染があると、約7人に1人は先天性難聴または出生後に遅発性難聴を伴ってることがあります。難聴の原因をしっかりと調べることで、成長とともに聴力が改善または悪化するか、また他の合併疾患の可能性などを事前に予測し、個別に早期から対応していくことができます。研究センターと共同でこうした原因の解明や、薬剤性難聴の感受性遺伝子の解明なども行っております。また、療育施設とも定期的に情報交換を行い、

1人の子どもをチームで診療する体制をとっているのが特徴です。

■中耳炎、中耳疾患：反復する中耳炎に対する鼓膜チューブ留置術や真珠腫、慢性中耳炎など、内視鏡も併用し、なるべく低侵襲な手術ができるように心掛けています。

■睡眠時無呼吸：年少児のいびきや陥没呼吸、睡眠時無呼吸など、年少のため麻酔や手術のリスクが高く、他の病院で治療が困難とされた場合にも麻酔科、集中治療科、総合診療科などのサポートを受けながら診療を行っています。

■喉頭疾患：声門下狭窄などは気管カニューレがなかなか抜けず難治性疾患です。少しでもQOLを高くすることを目標としており、バルーンを用いた声門下拡張術や肋軟骨を用いた喉頭気管形成術などを年少時から積極的に行っております。病態によっては内視鏡下に低侵襲手術を行うことも可能になりました。いずれも良好な結果が得られており、年々患者が増加してきています。また、乳幼児の喘鳴の相談も多く、隠れた病変が見つかることもありますので、早期に対応するようにしています。



左から、井上 剛志、高田 夏希、渡部 高久、守本 倫子、原 真理子、高橋 望、甘利 泰伸

研究所 新所長より

研究所長・再生医療センター長
梅澤 明弘

--- 成育医療研究に邁進します ---

当研究所は、日本で2施設しかないヒトES細胞樹立機関のうちの1つで、日本におけるヒトES細胞研究の拠点としての役割を担っています。現在までに、7株のヒトES細胞(SEES1-7)を樹立してきました。再生医療センターでは、ヒトES細胞を用いた尿素サイクル異常症患者の肝細胞移植治療のための、HAES(ヒトES細胞由来肝細胞様細胞)を開発しています。日本で唯一、医薬品医療機器等法にのっとりES細胞からの再生医療等製品の医師主導治験を進めています。

国立成育医療研究センターの病院に向き合う形で当研究所があります。赤い屋根で暖かい色の病院に対して、近未来を予感させるような銀色の研究所は、入ると長い木の階段を登るところから始まります。高い天井の広いフロアでは、多くの科学者が対話をする姿を見ることができます。高い階からはきれいな世田谷の町やウルトラマンを生んだ円谷プロ、ゴジラを生んだ東宝スタジオ、NHK技術研究所、民放のTMC(東京メディアシティ)スタジオをながめられます。また遠くに見える富士山は、夕暮れ時には沈む太陽と相まって研究員達の心を癒やしてくれます。

研究所と病院の間には渡り廊下がありその廊下は、春になると桜に囲まれます(添付写真)。桜の木が大きく育ち、渡り廊下の高さまで育ってきました。これは、私が20年前に当センターに来たときに、患者さんに寄り添うことができる医療と研究をつなぐ「夢の架け橋」であると伝えられました。架け橋は、医師、看護師、メディカル・スタッフの方々に加え、研究所の科学者の通り道で、人々とともに、情報、細胞、遺伝子、蛋白質がこの架け橋を介して運ばれています。わたしたちの理念は、病院と研究所が一体となり、健全な次世代を育成するための医療と研究を推進すること

です。その病院と研究所をつなぐ渡り廊下が文字通り架け橋になっています。その理念に基づき、研究所の使命は、1)倫理観を伴った研究の推進、2)エビデンスとして耐えうる研究の推進、3)研究を実践するスタッフの育成、4)情報の発信です。研究所長として、この使命を達成すべく、誠実に精進し努力する所存です。



左)所長秘書 塚本 元子、右)所長 梅澤 明弘



病院と研究所をつなぐ「夢の架け橋」

【経歴】

慶應大学大学院医学研究科課程修了、米国カリフォルニア大学サンディエゴ校・内科学研究員などを経て、1994年より慶應大学医学部病理学助教。2002年、当センター生殖医学研究部長就任、2015年、再生医療センター長および細胞医療研究部長を歴任、2021年4月、研究所長に就任。その他文科省生命倫理安全部会委員、日本再生医療学会理事なども務める。

新任あいさつ

企画戦略局長
北澤 潤



2021年3月1日付で国立成育医療研究センター(以下「成育」)企画戦略局長を拝命いたしました北澤 潤です。私は、初期臨床研修後、旧厚生省へ入省し、母子保健課、旧国立病院部経営指導課をはじめとした省内各部署、旧労働省(産業保健)、旧文部省(学校保健)、地方自治体(埼玉県、栃木県)などで行政を経験してきました。

2017年の母子保健課では五十嵐理事長はじめ成育の先生方や職員の皆様に大変お世話になりました。在課中、健やか親子21の推進、ヒト受精胚のゲノム編集の議論、チャイルドレスレビュー、産後ケア、母子保健情報の電子化・標準化の検討など、成育に非常に関わりの深い業務に携わりました。離任後、2018年12月に成育基本法が成立

し、2021年2月には基本的な方針も閣議決定されたところです。同法の目的である「基本的な成育過程にある者等に対し必要な成育医療等を切れ目なく提供するための施策を総合的に推進する」ためにも、成育の果たす役割は非常に大きいと感じています。

昨年2月の横浜港ダイヤモンドプリンセス号の検疫対応開始時には、新型コロナウイルスがこれほど長期に大きく影響を及ぼすとは予想していませんでした。今後の人口減少・急速な少子化の進展もあいまって成育医療を含めた医療は大きな変革が求められると思います。様々な環境変化に柔軟に対応できるよう微力ながら職務に邁進してまいりますので、よろしくお願いいたします。

新任あいさつ

小児がんセンター 移植・細胞治療科診療部長
坂口 大俊



この度、1月16日付で赴任いたしました坂口 大俊(さかぐち ひろとし)と申します。

造血系は肝臓や心臓など固形臓器のような形を有していませんが、多種多様な細胞や支持組織が互いに綿密に連携して様々な役割を担っています。さらに、それらの細胞はたった一個の造血幹細胞から分化して構築されることが動物実験でも示されており(Osawa M, Science 1996.)、学生時代にそのダイナミックさに感銘して、私は造血細胞移植医を志しました。日本における骨髄移植のメッカの1つは名古屋であり、名古屋には縁も所縁もありませんでしたが、小寺 良尚先生(現・日本骨髄バンク理事長)が研修管理委員長をされていた名古屋第一赤十字病院で初期研修を開始しました。血液内科医になる気満々で研修をスタートしたのですが、同院では小児血液腫瘍科も活発に移植を行っていて、当時、日赤にいらした松本 公一センター長はじめ、小児血液の先生方の働く姿が活

気に溢れ、その中に入って一緒に働きたいという思いが強くなり、気づけば小児血液の道を歩んでおりました。名古屋では白血病や小児がんだけでなく、造血不全症や先天性代謝疾患のお子さんの造血細胞移植にも取り組んで来ました。非悪性疾患にも適応が広がる造血細胞移植を、より安全により確実に実施できることと、難治性悪性疾患のお子さんに対しては、再発を防げるような治療戦略を、移植、細胞療法、支持療法を組み合わせ構築していくことを目指しています。

趣味は山登りで、家族で富士山や槍ヶ岳も登りました。コロナ禍が終息して、山小屋が再開されたら、関東の山々にも足を伸ばしたいと願っています。

【経歴】

2005年 滋賀医科大学医学部医学科卒業。名古屋大学医学部附属病院、名古屋第一赤十字病院小児科医員を経て、2011年米国フリーブランドクリニックDr.Maciejewski研究室に短期留学。2013年博士号取得、名古屋第一赤十字病院 小児医療センター血液腫瘍科 医長 2021年1月より現職

東京都立光明学園 病弱教育部門 そよ風分教室

東京都立光明学園そよ風分教室は、成育医療研究センターに2週間以上の入院を必要としている小学生から高校生までのお子さんが、入院の間だけ、学籍を移して通っている学校です。それまで通っていた学校と、授業時数もほとんど変わりません。治療や体調不良のために分教室に登校できないお子さんには、ベッドサイドに教員が赴き、授業を実施しています。

ただ、今年度は、COVID-19の感染予防のため、ONLINE授業の実施となりました。

副校長と主幹教諭に伺いました。

Q.ON LINEで授業の方法などについて教えてください。

A.東京都から支給されたiPadタブレット20台を用いて、学年ごと(最大4名まで)の授業を小学校低学年は1日2単位時間まで、小学校高学年以上は3単位時間を基本として行いました。お子さんの学習進度に合わせて毎週時間割の組み直しを行いました。
*1単位時間とは、小学部:45分 中学部:50分 高等部:50分

Q.どういった点が苦勞なさいましたか?

A.教室と違い、画面越しではどうしても子どもの表情が読みづらい、ということがあります。具合が悪くないかなど、いつも以上に注意が必要でした。

Q.お子さんの反応やメリットはありましたか?

A.学校でお友達に会いたい、というのは常にあります。たまにはゲーム的な内容を取り入れて、コミュニケーションを図る工夫もしました。

一方で、中学生には、マンツーマンで行うこともあり、非常にわかりやすかったという声もありました。この状況は「そよ風分教室」だけでなく、すべての都立学校で起こりました。このことによって、みな、オンライン授業による学び(学習)を経験するこ

とで、そよ風分教室での学び方が特別ではなくなり、本校の理解を得やすくなったという側面はあると思います。

ON LINEの授業が進んだことで普及すると、本校のように治療のために入院するお子さんだけでなく、不登校のお子さんへの対応にもつながり、学校へ通学することだけでなく様々な学び方で、学びを深めることへの垣根が低くなる気がいたします。

Q.主要教科以外の授業についてはいかがでしょうか。

A.特に図工に関しては毎年の作品展の他に今年はプロのアーティストの方を招き、「光明アートプロジェクト」という、そよ風分教室で学ぶ子どもだけでなく光明学園に在籍する子どもたち全員が参画した壁画共同制作に取り組みました。それぞれに描いた絵を体育館の外壁に展示し、一つの作品として仕上げました。自分が行った取り組み(学習)が具現化し、共同することにより得られる他者との「つながり」はさらなる学習意欲を高める効果があったと感じています。

Q.最後に何かございますか?

A.授業はしたい、だけど命を守ることが1番ですので、最大限の感染予防対策を講じながら「学びを止めない」ための方策を、創意工夫を重ねながら「子どもたちを全力で守り導き、伸ばす学校」として進んできた1年でした。このことは、病院関係者の協力なしにはできませんでした。感謝申し上げます。平穏な日々を取り戻すまでは引きつづき宜しくお願い申し上げます。



アドバンス助産師

三浦 加奈



「おめでとうございます!」何人もの分娩に立ち会っていても、一番好きな瞬間です。私が助産師を目指したきっかけも、看護学実習で初めて分娩を見学した時でした。それまでは、恥ずかしながら助産師という職業さえ知りませんでした。助産師とは、妊娠・出産、子育ての支援をはじめ、女性や子どもとその家族に関する様々な問題に対し、支援する職業です。大学生だった私は、「生命の誕生」という家族の大きなイベントに関わることが出来る唯一の職業が助産師であると考え、看護師の免許とともに助産師の免許を取得しました。その後当センターへ就職し、2019年度にアドバンス助産師の資格を取得しました。

アドバンス助産師とは、助産実践能力が一定水準に達していることを客観的に評価する仕組みで、2015年に開始されました。日々の助産業務に加え、必要な研修を受講し、助産に関する知識や技術がブラッシュアップできているかを5年ごとに確認され、一定のレベルに至っていることを認定された助産師のことです。

当センターには20名のアドバンス助産師が在籍しています。総合周産期母子医療センターである当センターは、正常な経過をたどっている方だけでなく、基礎疾患がある方、胎児に病気が見つかった方など様々なハイリスクな妊産婦さんが入院し、出産しています。もちろん喜ばしい出来事だけではなく、悲しい結果となった患者さんへの身体とこころのケアを行うことも助産師の仕事です。

私は病棟助産師として、主に分娩と産後の母児のケアや、母乳外来と助産師外来の担当、マタニティクラスの運営なども行っています。今年度は新型コロナウイルスの影響で保健指導を十分に実施することが出来ませんでした。オンラインでのマタニティクラスが2020年12月から開始となり、保健指導の充実に繋げることが出来ています。また、助産師外来では、妊娠中の悩みや

分娩に向けて個別の保健指導を行っています。妊娠に関わった患者さんが分娩のため入院しますが、現在は立会い出産や面会が禁止となっている状況のため、患者さんは一人で分娩を乗り越えなければなりません。患者さんを励まし続け、赤ちゃんが元気に誕生し、泣いてくれた瞬間はとても感動します。その後退院までの間に、自宅に帰ってからも育児で困ることがないように、授乳や育児に関する産後ケアを行います。退院後の母乳外来では、母乳ケアだけでなく、育児のサポート状況や過ごし方などを聞き、支援が必要だと判断した場合は地域の保健師や助産師に連絡し、切れ目なくケアを受けられるよう支援します。

患者さんが笑顔で退院し、成長したお子さんを連れて私に会いに来てくれたり、第2子を妊娠してまた関わることが出来ることも、とても嬉しく、助産師としてのやりがいを感じます。

アドバンス助産師更新に向けて、日々自己研鑽を行い、安全で安楽な助産ケアを提供できるよう今後も努力し、後輩助産師の育成にも力を入れていきたいと考えています。



左から 大福 春佳、三浦 加奈、川田 磨美、市島 美保、宮本 日香里、山内 愛

研究所

共同研究管理室

田所 恵子

当センターの各研究者の研究活動が円滑に進むよう、共同研究設備・共用研究機器の管理運営および共同研究の調整を行っています。特に運営部門の指示を仰ぎながら、研究所の共同研究区域がより有効かつ効果的に利用されるよう、支援を行っています。共同研究区域においては、各研究部室、再生医療センター、臨床研究センターの他、病院部門各科の臨床研究従事者が、緊密に連携しながら臨床研究を推進しています。共同研究区域の管理業務の一環として、研究者の意見、希望、協力をいただきながら、分け隔てなく公平な運営を心掛けるとともに、研究者からの日々の問い合わせ（機器の利用方法、機器故障時の応急処置、パソコンウイルス駆除、等）に対する対応を行っています。また、研究者向けに、有用な最新技術、最新機器、ソフトウェアの紹介をテクニカルセミナーおよび機器取り扱い説明会の開催により行う一方で、反対に、研究者からの要望を取りまとめて管理運営に反映させることも重要な業務となっています。

当室は独立研究室として位置づけられており、管理業務の他、研究活動を行うことも可能となっています。研究面では小児期の発育形成異常疾患や小児腫瘍の原因遺伝子の機能と作用機序を解析することで、病態との関係性、遺伝子診断・治療への知見を得るべく研究を進めています。特に、発生・分化時に作動する転写調節因子の変異が多様な病態を呈する事実を見出し、その作用機序を解析しています。



臨床研究センター

臨床研究相談・支援窓口のご案内

当センターでは、医療と医学研究の相補関係を構築するため、医療機関をはじめ企業あるいは大学などからの臨床研究、治験等に係る様々な相談（生物統計を含む）を受けつける臨床研究相談・支援窓口を設けています。医薬品・医療機器などの開発、臨床におけるResearch Questionの解決にご利用ください。

<相談及び支援の内容>

- 臨床研究、医師主導治験、企業主導治験の実施・計画策定などに関すること
- 疫学調査の実施・計画策定などに関すること
- 成育REDCapシステムの利用に関すること
- 知財・産学連携に関すること
- 遺伝子細胞治療に関すること
- 各種講演、講義の受託に関すること
- その他、臨床研究・治験などの相談・支援に関すること

<直近3年間の相談件数>

	2020年度(4月~12月)	2019年度	2018年度
成育内	104件	101件	96件
成育外アカデミア	15件	66件	64件
営利企業等	14件	24件	21件
計	133件	191件	181件

<申込み方法・費用など>

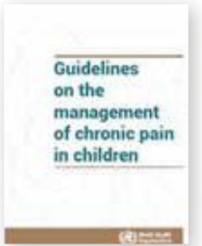
- 相談日時・時間・場所** 申込み後に日程調整を行います。1時間程度。Webを含むご指定の方法で実施します。
- 相談費用** 初回は無料。その後、各種相談・支援を希望される場合は当センター規程の費用がかかります。
- 申込み方法** 相談をご希望の方は、下記より電子メールにてお申し込みください。

<https://www.ncchd.go.jp/scholar/clinical/section/madoguchi.html>

WHO(世界保健機関)が小児慢性疼痛の治療ガイドラインを発表しました

慢性疼痛とは3か月以上続く疼痛のことを指します。慢性疼痛を持つ子どもたちは、同世代の子どもたちと比較して、身体障害、不安、抑うつ、不眠、学業成績の低下などの問題が起こりやすいと報告されています。研究結果から、25-30%の子どもが慢性疼痛を有しているとされており、そのうちの多くが慢性疾患を抱えている子どもであるとされています。本ガイドラインでは痛みを生物学的、心理学的、社会的要因間の相互作用の結果である複雑な多角的経験として

捉え、生物心理社会的(Biopsychosocial)な観点での評価の重要性を謳っています。当センター緩和ケア科診療部長 余谷 暢之もガイドライン策定メンバーとして作成に貢献しました。以下のURLから入手が可能です。<https://www.who.int/publications/i/item/9789240017870>



成育医療等の提供に関する施策の総合的な推進に関する基本的な方針が閣議決定されました

政府は、「成育基本法」(2018年12月成立)の規程に基づき、「成育医療等の提供に関する施策の総合的な推進に関する基本的な方針」を2021年2月9日に閣議決定しました。この方針の中では、基本的方向として、ニュースでも多く取り上げられている産後うつが「妊産婦のメンタルヘルス」という項目で取りあげられています。また「父親の孤立」という項目では、父親の産後うつも課題となっており、出産・育児に関する相談支援は母親と父親を対象とすることが必

要と明記されました。さらに、当センターが普及を目指している「プレコンセプションケア」についても取り上げられています。今後は、この「基本的な方針」に基づいて、国、地方公共団体、企業や地域社会が、成育医療を切れ目なく提供するための施策の推進に取り組むことが期待されています。詳細は、当センターHPをご覧ください。



2021年度版「センターのご案内」発行のお知らせ

当センターは病院と研究所が密接に関わり合い、子どもや青年そして妊娠・出産に関わる女性に安心・安全で質の高い成育医療を提供するとともに、心のこもった患者支援を行うことを目指しています。冊子では、各診療科の診療方針、体制、得意分野、対象疾患について他、各研究部の研究内容、先進医療などについて詳細に紹介しております。センターHPでもご覧いただけますので、参考になさってください。<https://www.ncchd.go.jp/center/pr/guidebook.html>



医療連携・患者支援センターより

当センターは出産により新たな家族を迎え入れる親御さん、初めて入院を経験するお子さんご家族、長期の療養が必要なお子さん、自宅でも医療ケアを必要とするお子さんなど、さまざまな方が入院なさいます。平均入院日数は9日ほどですが、入院治療を経て、安心して自宅や地域での生活に戻っていただけるよう、退院後の心配を出来るだけ軽減する取り組みを行っています。入院直後から退院支援が必要かどうかを専用のチェック表を用いて検討し、支援情報の提供が必要と思われる方には、お声をかけています。さらに、支援を必要とする方に漏れなく声をかけることが出来るように、昨年10月から入院3日以内には検討結果を病棟看護師・退院支援看護師・社会福祉

士・医師などと情報共有し必要な情報提供や相談のご案内を随時行っております。既に地域で医療や福祉のサービスを受けていらっしゃる方には該当医療機関と積極的に連携をとり、継続的にサービスが受けられるよう情報共有に努めております。何かご質問等ございましたら医療連携室にご連絡ください。

